



# 歩いて知るきのくに歴史探訪 湯川氏の故地を訪ねる

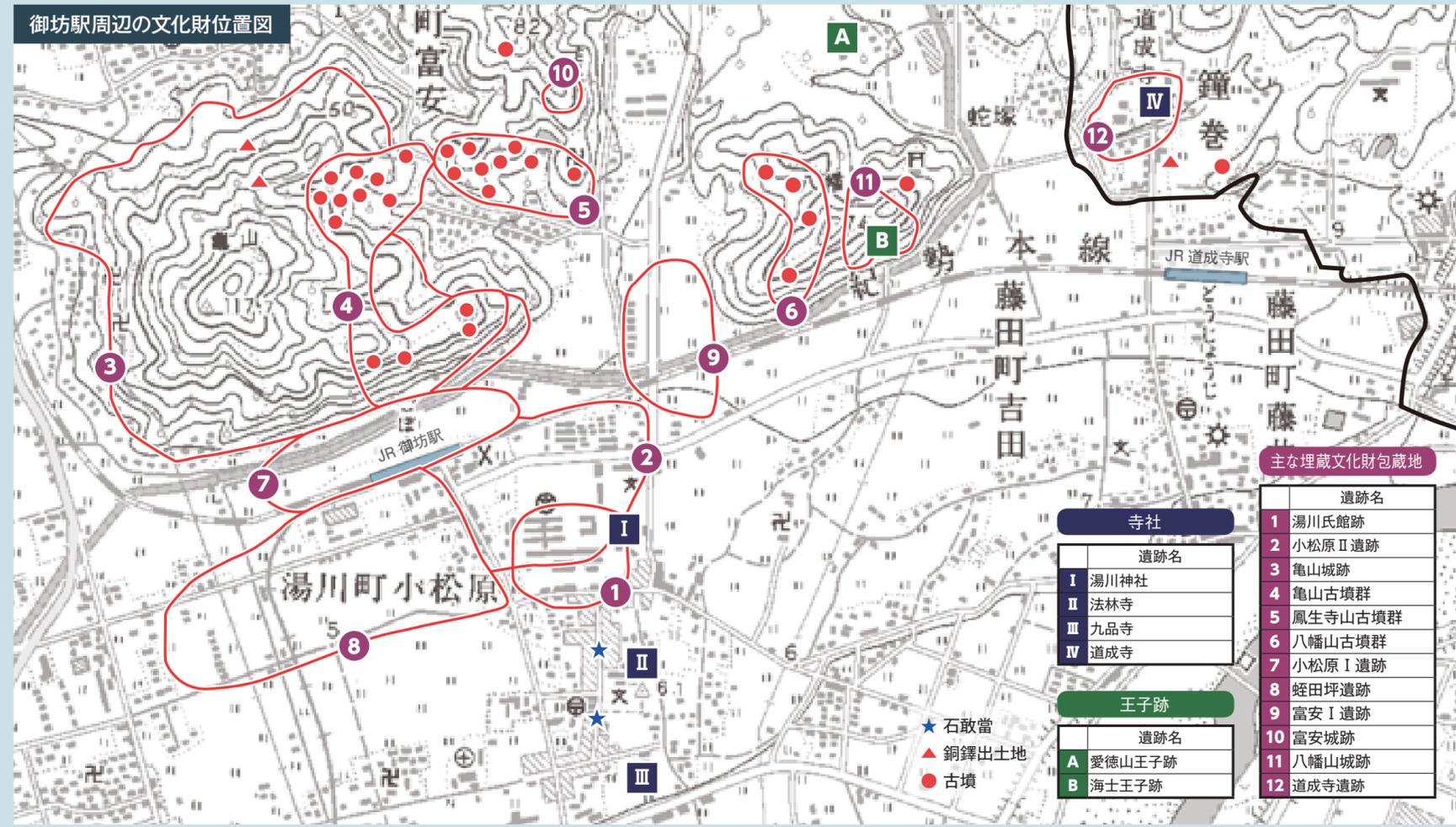
古絵図で歩く御坊駅周辺の文化財マップ



上：湯川氏館跡と亀山城跡 下：湯川神社  
左下：九品寺境内の大名塚 右下：湯川小学校近くの石敢當

**湯川氏**は、室町幕府全盛期に幕府奉公衆として活躍していました。戦国時代には紀州国人領主の旗頭的存在として日高地方を拠点に勢力を振るっていました。御坊駅周辺には湯川氏に関する遺跡や寺院等が点在しています。亀山城跡は湯川氏の居城として築かれ、小松原Ⅱ遺跡の一角と湯川神社の場所に湯川氏館跡が存在していました。法林寺は湯川直光により湯川氏の菩提寺として創建され、境内には湯川氏の供養塔である宝篋印塔が建っています。九品寺は境内に悲運の死をとげた松平頼雄の供養塔とされる大名塚が建っています。石敢當は魔物の侵入を防ぐ魔よけ石とされ、沖縄や南九州などに多く見られますが、和歌山県内では2基確認されています。

**御坊市**には、市名の由来となった日高御坊（本願寺日高別院）、熊野古道、堅田遺跡、岩内古墳群などの多くの文化財が存在しています。近年、発掘調査で詳細が明らかとなってきた湯川氏館跡を中心とした湯川氏に関する文化財と、その周辺に所在する文化財などを紹介します。マップを手歩き、御坊市の歴史を再発見しましょう。



和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図をもとに作成

**湯川氏について**

湯川氏は清和源氏武田氏の流れを汲み、湯川の始祖については諸説があるが、武田範長の末子として甲斐の奈古に生まれた三郎忠長と考えられています。忠長は熊野道湯川に入り、忠長を迎え入れた湯川庄司の娘を妻として熊野に腰を据え、近くの岩神峠に出没する山賊を退治するなどして武名は近隣に鳴り響かせたそうです。その功によって六波羅探題から牟婁郡を賜り、牟婁一円を支配下におき、その後、芳養（はや）に進出して内羽位の館を築いて新たな本拠としたそうです。そして、平井、脇田らの家臣を従え、武田を改めて湯川を名乗ったとされています。

室町幕府全盛期には幕府奉公衆として活躍し、戦国時代には日高郡亀山城を本拠として、紀州国人領主の旗頭的存在として勢力を振るいました。しかし、豊臣秀吉が紀州を平定するため、天正13年(1585)に十万余の大軍を率いて出陣し根来寺を焼き討ちにし、太田城を水攻めにすると同時に、紀南地方の平定に着手しました。紀南に進攻した秀吉軍は湯川方の諸城や湯川氏の本城である亀山城を攻撃したため、亀山城を焼き払って熊野山中に退き抗戦を続けました。このことから、秀吉は湯川氏の攻略をあきらめ本領安堵を条件に和議が成立しました。

紀伊国は秀吉の弟豊臣秀長に与えられ、翌天正14年(1586)に湯川直春は山本主膳とともに、大和郡山城に和議のため参候した際に謀殺されたとされています。これにより、秀吉の紀州平定が完成しました。直春の死後、嫡子丹波守光春は秀長に仕えて三千石を領しました。秀長の没後は、浅野家に仕えて安芸に移り宮島奉行を勤めました。湯川氏の家臣団は四散し、紀州の在地領主層も近世的封建体制に組み込まれ、紀南の中世は終焉を迎えました。

**石敢當**

石敢當（せっかんとう、いしがんとう）は、中国福建省が発祥とされる魔よけの石碑です。中国、台湾、シンガポール等の東南アジアの一部の地域で見られ、日本では沖縄県、鹿児島県に多く見られます。建立年が銘刻されているものの中では、鹿児島県志布志市にある元和2年(1616年)に建てられたものが日本で最も古いものです。沖縄県、鹿児島県以外の石敢當は近年になり、主に沖縄出身者により建てられたものが多いが、大分県臼杵市豊屋町には、『豊後国志』によると天正3年(1575)に建立されたとされる石敢當があります（何度か建て替えられており、現存するものは1877年に建立されたものと考えられています）。また、東北地方、特に秋田県には幕末から明治初期に建てられたと考えられる古い石敢當が多数確認されています。和歌山県では、御坊市で2基確認されており、2基とも湯川小学校付近に存在します。普通に歩いていると気づきませんが、塀の中に取り込まれたものと、三叉路の突き当たりにあります。誰がこの場所に設置したかは不明です。



石敢當1



石敢當2

**法林寺**

永禄5年(1562)に日高平野最初の浄土宗寺院として湯川直光により、一族の菩提寺として創建されました。初代住職には直光の三男民之進が出家し、「存眷欽公」という僧名で就任しています。本堂は、天保6年(1835)に再建され、平成14年(2002)に平成大修理工事を行い伽藍が整えられています。境内には法林寺を創建した湯川直光と初代住職の存眷欽公の供養塔である宝篋印塔が建立されています。また、湯川氏は清和源氏武田氏の流れを汲むことから、法林寺の瓦などには武田家とのつながりを示すとされる浮線蝶の紋を見ることができます。法林寺の東側には熊野古道紀州路が通っており、小松原の地は、平安時代より熊野古道の宿場町として栄えていました。



法林寺本堂



宝篋印塔

**九品寺**

九品寺の創建年代は不明ですが、常楽記という本に康暦2年(1380)に小松原の宿で他界した人を九品寺で荼毘に付したとの記述があることから、これより以前に創建されたとみられます。もともとは時宗の寺院でしたが、戦国時代に入り衰えを重ねていました。しかし、慶長年間に宝譽という僧侶が九品寺に滞在し浄土宗を唱えたと多く多くの信者が出来たため、浄土宗の寺院として再興されました。かつては末寺56ヶ寺を有する大きな寺院でした。本尊の阿弥陀如来座像は、鎌倉時代の名工である運慶の弟子、運管の作といわれています。境内には大名塚と呼ばれる無銘の五輪塔があり、悲運の死をとげた松平頼雄の供養塔とされています。松平頼雄は八代将軍徳川吉宗の従兄弟にあたり、伊予西条藩主の嫡子でありながら、実の父に疎まれ無罪の罪により廃嫡され、謎の死をとげています。一説には、頼雄は九品寺で暗殺されたとも伝えられています。



九品寺本堂



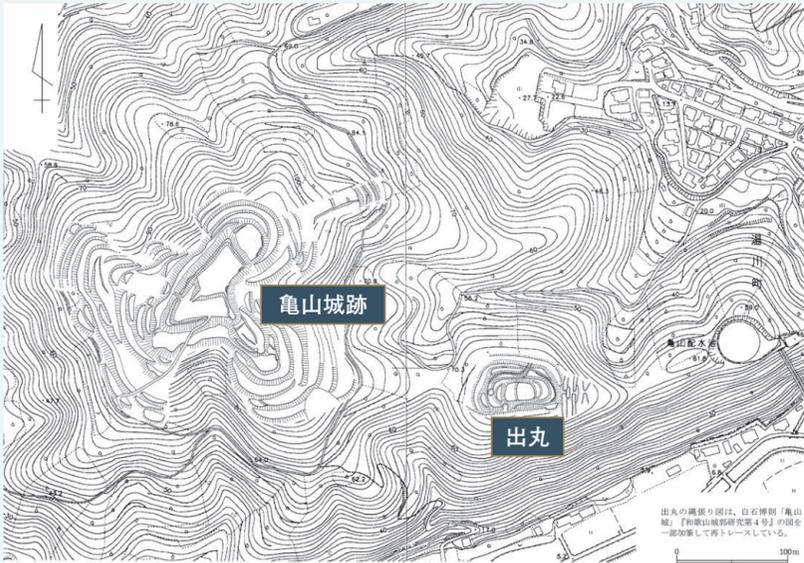
大名塚

歩いて知るきのくに歴史探訪 ~湯川氏の故地を訪ねる~  
古絵図で歩く御坊駅周辺の文化財マップ

平成28年(2016)1月30日発行  
発行：公益財団法人和歌山県文化財センター(〒640-8301 和歌山市岩瀬1263番地の1)

\*この見学会は 平成27年度和歌山県内埋蔵文化財地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業の補助金を受けて実施しています。

## 亀山城跡



亀山城跡縄張り図

亀山城跡は、JR御坊駅の北側にある亀山（標高約122 m）に築かれた山城です。湯川氏館跡（小松原館跡）が常時に生活する場所であったのに対し、亀山城跡が戦いときに籠ることを想定した詰めの城でした。山上からは、日高平野を一望することができ、平野の向こうには太平洋を望むことができます。

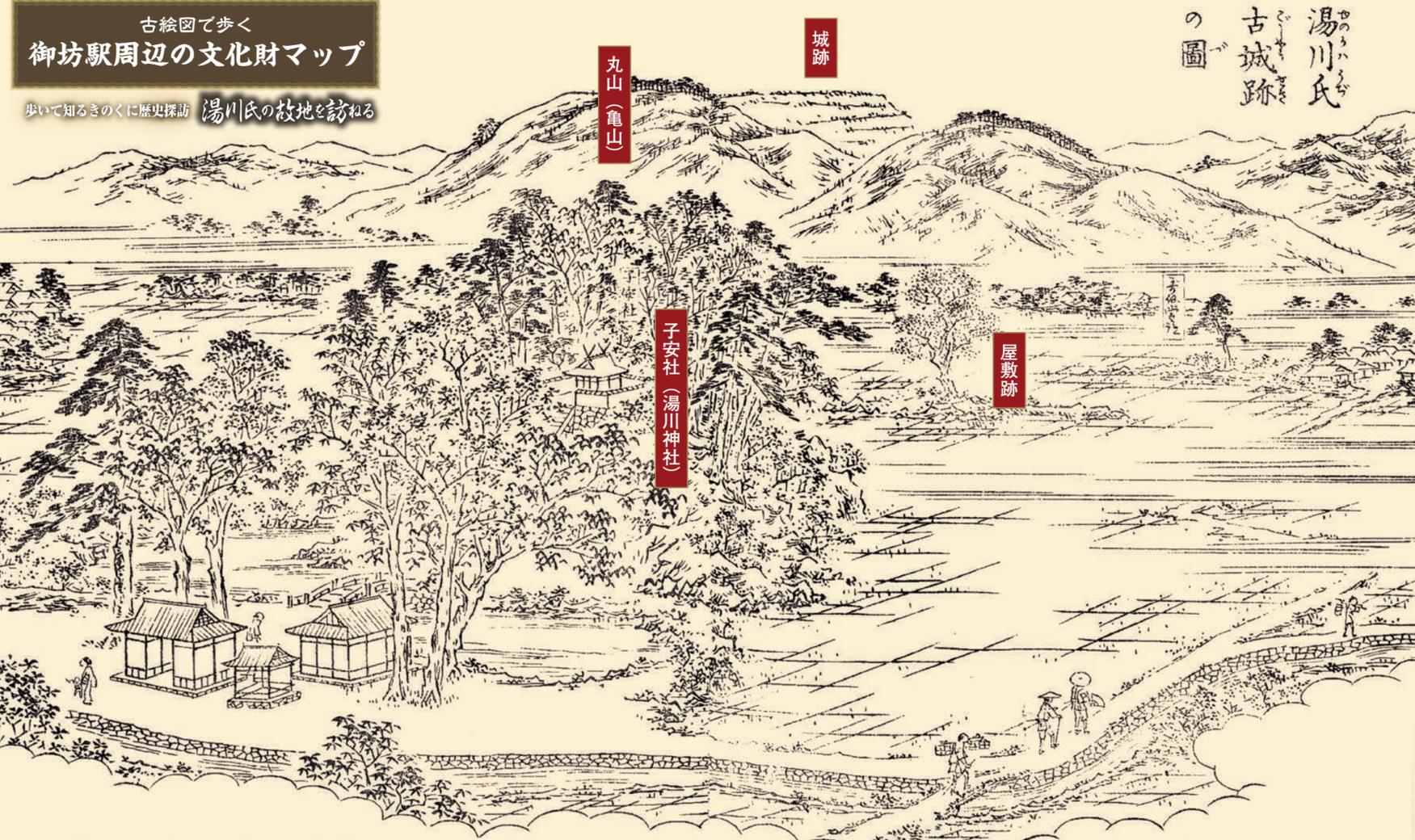
城跡は、畑の開墾により一部破壊されていますが、比較的良好に曲輪などが残存しています。構造は、亀山の頂上部に大規模な土塁や高い切岸を巡らした2段からなる主郭部を置き、頂上部からひだ状に派生する幾つもの小尾根部や斜面地に、山を取り巻くように長く伸びる曲輪を階段状に配しています。曲輪を配する範囲は、玉置氏の居城である日高川町の手取城跡やみなべ町の平須賀城跡とともに県下最大規模と言えます。また、周辺の山城では、曲輪を頂上と尾根筋を中心に線状に配し、尾根筋に大規模な堀切を用いて敵の進入を遮断するのが通例としますが、亀山城跡では小規模な堀切はあるものの、遮断は主に山腹に長く伸びる曲輪に頼るものです。城の周囲は約2kmありますが、これは必然的に動員できる兵が多かったことの証左でもあり、湯川氏の家臣の多さ・兵力を物語るものと言えます。

このほか、亀山城跡の周辺では、東側の尾根伝いにある標高83 mの小ピークに出丸が築かれています。出丸は曲輪の造成が甘いものの、横堀や土塁、3連続の堀切がありますが、単体の城と言うより、亀山城を守るために尾根筋からの敵の進入を防ぐ目的で築かれたと考えられます。また、鳳生寺山の裏にある標高85 mの頂部にも亀山城跡の出城とされる富安城跡があります。これらも含めると、亀山城跡の規模は更に大規模なものとなります。

亀山城跡からは、これまで城に係る遺物が1点も採集されていません。発掘された日高地方以南の山城では、日常雑器をはじめとする遺物が出土しています。また、手取城跡や地域の拠点となる平須賀城跡、日置川流域の安宅八幡山城跡では、多種多様の日常雑器のほかに茶道具なども見つかっており、一時的に立て籠もるだけではなく、恒常的に生活していたことが分かっています。城の性格上、少なからず兵は詰めていたと考えられ、最低限の日常雑器は使用していたと考えられますが、亀山城跡から遺物が見つからないのは特異なことと言えます。



亀山城から日高平野を望む



紀伊国名所図会をもとに作成

## 小松原Ⅱ遺跡

小松原Ⅱ遺跡は、縄文時代から江戸時代にかけての遺跡で、JR御坊駅付近から紀央館高校・湯川中学校付近にかけて広がっています。周辺は、日高地方でも遺跡が最も集中する地域で、各期を通じて当地方の中核を占めてきました。

これまで、数多くの発掘調査が行われ、遺跡の様相が明らかになっています。遺跡が最も活況を呈するのが弥生時代中期以降で、堅穴建物や溝などが多く見つっています。また、遺跡のすぐ近くからは、県下最古の銅鐸も出土しています。

古代では、役所である郡衙や寺院が存在したと考えられます。寺院は、出土した瓦が道成寺創建期のものと同じで、「日本霊異記」に登場する「別寺」の可能性がります。

平安時代以降、熊野街道が遺跡付近を南下し、遺跡に接する小松原集落は、日高川の渡河を控えた宿場町でした。また、鎌倉時代から室町時代前半頃には、高校・中学校付近に浄土系寺院が存在したことが窺えます。その後、寺院のあとに湯川氏が館を築きます。



道成寺創建期の瓦

## 湯川神社

湯川中学校の南にある神社で、湯川氏館跡の一画に位置します。言い伝えでは湯川氏が館の一隅に明神社を祀っていたのが始まりで、16世紀後半頃、湯川直春が姫の安産を浅間神社（静岡県富士宮市）に祈願し、その御分霊を亀山城中に勧請し明神社と合祀し祀ったとされます。秀吉の紀州攻めの後、亀山にあった神社を現在の位置に移して浅間神社の御分霊と明神社とを合祀し、子安大明神として再興したとあります。

現在、神社の前には池がありますが、これは館の庭園にあった池の一部で、元々は神社を巡るように掘られていたことが分かっています。神社は小高い丘に鎮座していますが、これは池泉庭園の中島で、樹齢1000年とされるクスノキも庭園に生えていた木の可能性があります。

池には石造りの立派な太鼓橋が架けられています。



湯川神社の池

## 湯川氏館跡

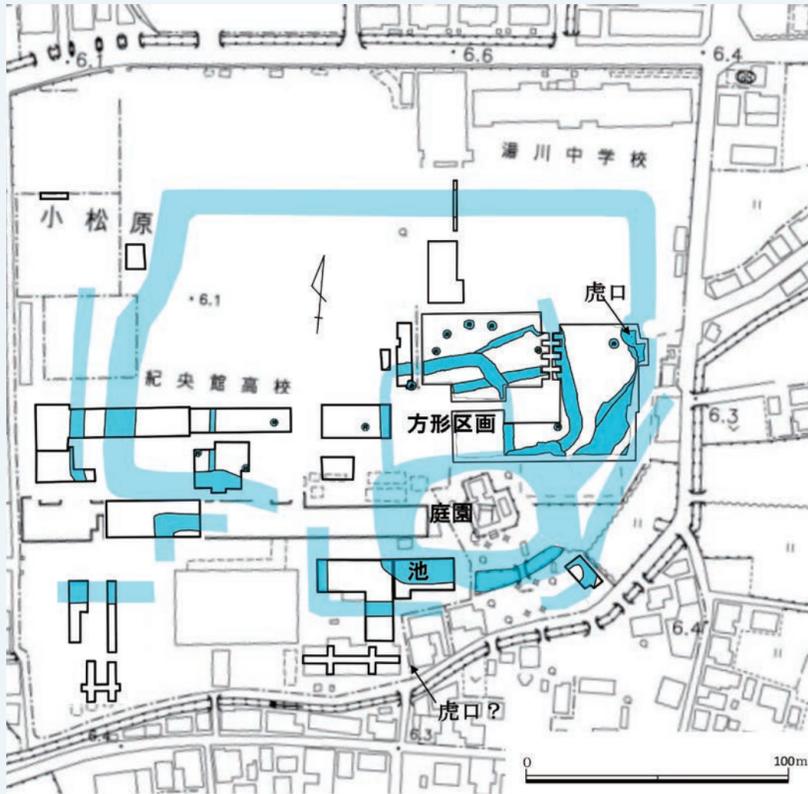
湯川氏館跡は、紀央館高校・湯川中学校の敷地に広がり、これまで校舎の建築などに伴い、十数次にわたり面積約8600㎡が調査されています。調査では堀・溝・井戸・石垣・池などが検出され、多量の土器類・瓦類のほかに金属製品・木製品などがみつき、館の規模や内部の様子が想像できるようになってきました。

堀は各所で確認され、方形区画を単純に堀で囲む単郭構造ではないことが分かっています。何度かの改修を経て大規模な構造になったと考えられますが、最終段階の館の規模は東西約225 m、南北約200 mであると想定できます。各地の守護館に匹敵する規模をもつことは、湯川氏の財力・権勢を物語るものと言えます。

館の南東部には、池泉を伴う庭園が築かれていたと想定することができます。湯川氏は奉公衆であることから、館の構造も基本的に幕府の室町第（花の御所）同様の方形居館となっています。各地の守護館も同様に方形居館であることが多く、庭園の位置も館の南東部に築くことが通例とされます。湯川氏館でも、まさにその場所に庭園が位置していることとなります。

庭園の北側には幅約4～6 mの堀で囲まれた東西約40 m×南北約30 mの方形区画が存在したことが窺えます。この区画の北側では大小の土師器皿が多量に出土し、式三献などの儀式がおこなわれた可能性があります。また、池に近い区画南側では輸入陶磁器などの高級品がセットで多量に出土しており、饗宴がおこなわれていたと想定できます。方形区画周辺には、儀式を執り行った主殿や会所が存在したと考えることができます。

湯川氏館は、出土遺物などから14世紀後半以降に、それまであった寺院のあとに築かれた可能性があります。最終段階の堀や池からは、焼けた瓦や建築部材・焼土が多量に出土し、館が焼失したことを物語ります。これは天正十三年（1585）、羽柴秀吉の紀州攻めに係る火災によるものであり、この時期以降の遺物が出土しないことから、同時に館は廃絶したと考えられます。



湯川氏館想定図